

笠丸修司 Story by Shoji Kasamaru

イラスト 帝恩 Illustration by Dean

RE  
RELAND NOVELS



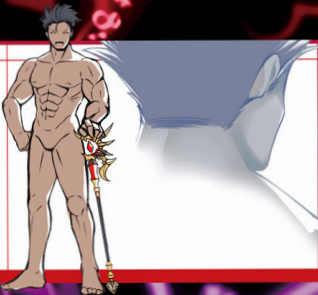
異世界の女は  
俺のもの!

Women  
from  
different world  
is mine.

～最強無敵マスター☆ロッド～

試し読み版

徹  
(トール)



Women from different world is mine!

# Characters

シンシア



アルフレッド



カレン



ローラ



シーリス



クレスタ



ステラ



カイル



ハルマ



Women from different world is mine!

Story by Shuji Kasamaru & Illustration by Dean  
Beginning Novels Series Presented by Kill Time Communication

◆◆◆Contents◆◆◆

プロローグ

006

◆第一章◆ カイル君とシンシアさん

011

◆第二章◆ アルフレッド君とカレンちゃん

069

◆第三章◆ 徹君とローラ姫

129

◆第四章◆ 魔王トールとハルマ君

215

◆番外編◆ ハルマ君の疑心暗鬼な隠居生活

309

あとがき

347

## プロローグ

——地下深く、とある迷宮の薄暗い部屋の中、男の声が響き渡る。

「ふおおおおお!! キタキタキタキタああああ!! この締め付け、この弾力、まさに新感覚!!」

すばははばはん、と激しく腰を動かすその男は元地球人。そしてこの迷宮支配者である。地球人の頃の彼の名を新井徹とびとつけた。

「ふはははは!! 小刻みにぶるぶるしおつてからに、この淫売め、感じているのか、感じ入っておるのか? 下等な牝の分際でえ、ほらほら、ほらほらほらあ!! ええのんか、ええのんか、小刻みに震えおつてここがええんのかあ!」

そう叫び、中腰のままさらに抽送の速度を上げる。男の腰がそれに打ち付けられる度に、狭い部屋の中にはんぱんと肌と肌がぶつかり合う音が小気味良く響く。

「フンフンフン!! くつくつくつ、この好き者め。きゆうきゆうとしやがつて、なんだかんだ言いながらよく締め付けやがる……。褒美にたっぷり出してやるぞ、それれ、それぞれ、そ——おふうッ」

決め台詞の途中で徹の腰がガクンと碎けた。ピクンピクンと彼の全身が痙攣し、その精を吐き出して快感の余韻に浸る。すべての精液を放出しきると、その股間部分にあてがっていた球体状の生物、あえてこの世界風にいえば、スライムと呼ばれる生物の中から逸物をすぽんと抜いて、ぽいつと放り投げる。

「ふう……」

ぽよんぽよんと、弾みながら部屋から出ていくメタルスライムを徹は見送る。そして彼はおもむろに部屋の机に設置されているノートを開き、書き込みを始めるのであった。

「……………あー、メタル属性のスライムは新感覚だったわー、予想に反して中身全然硬くない。むしろ柔らかか、今まで気づかなかったのはもったいなかったなあ……。後三カ月はこれで戦えるね。ちよつとだけ挿入時に冷たいのが玉に瑕……、と」

使いやすさ・締め付け・耐久度など、サラサラと項目を記入していく。そして、一通りの情報を記入した後、ペラペラとページをめくると、そこには徹が記した情報が、事細かに記されていた。

例えば、毒属性のスライムの安全なおナホールとしての使用法や、地下キノコから作るトリップ剤(自分用)、そ

して触手モニターに優しく乳首責めやアナル責めをしてもらうための調教方法など、偏ったものばかりであった。

今までの情報を見返し彼は満足そうに頷くと、ふー、と大きな溜息を一つ吐く。いわゆるやりきった男の顔であった。

——そして、

「だから、何をやってるんだ俺はああああああああああああああああああ!!!」

地球が存在する世界において、世間に不必要な童貞魔法使い新井徹は三十歳にして見事異世界へ到達するという目的を果たした。しかしそれは羨むべき勇者召喚でもチート神様転生でもなく、朽ちて閉じた古代の迷宮の支配者として地中深くに放り出されてしまったのだ。

今自分が居る場所が、果たしてどのくらい深さなのかわからない。この五年間、出口を探して掘り進めているものの、一向に地上へと出る気配はなかった。何故か空気はあるので息はできる。飲料水は地下水脈を掘り当てた。この環境で生きていく上で必要なものは前任者の遺物がありなんとかなっている。食べ物といえは専ら迷宮に生える

キノコであった。

「どうしてこうなった」

そう呟いて徹はマスターロッドを一振りし、遠視投影魔法を使う。その画面の中には、美しく広がる異世界の風景が広がっていた。その画面に映る冒険者達の姿を羨ましく思いながら、彼は菌ぎしりをする。遠視投影越しに、彼らから聞こえてしまう明らかに転生を果たしたときか思えない会話が徹の心にザクザクと突き刺さる。

——片や地中深くでスライムで寂しく性欲処理を行う新井徹。

——片や同じく転生を果たし、きやつきやうふふと、異世界美少女達とちちくり合う彼の仲間達。

「不公平だあ」

血の涙を流しながら、徹は呟いた。

女の子から転生者へ向けられる羨望の眼差し、腕を組んでいる時に肘に当たっている明らかな胸の膨らみ、そして約束されたラッキースケベ。あ、とか、やん、とか、やだもう、とか明らかに満更ではない女の子の表情。

「ああああ……うああああああああああ!! その乳と太ももは俺に配られてもおかしくなかったのに、なんで俺だけこんななってるんだああああああああ!! それぞ、

その胸ちよつといいからつつかせんかーい!! 股間に俺の顔挟まんかーい!!」

このダンジョンの備品であるマスターロッドにより、遠視投影の魔法を知り、そして使用した時、徹は酷く現実打ちのめされた。

それもそのはず、そこには確かに徹の夢があつた。彼の思い描いた希望があつたのだ。しかしその世界は、今彼が居る場所からは、決して届かない隔絶された世界であつた。何故自分だけ元の肉体のまま、この世界に呼び寄せられたのか、何故他の者達は転生者として人生を楽しくやり直しをしているのかもわからない。チート生活に比べて地下送りととはあんまりな環境に彼はがっくりと肩を落としたものだ。

だがしかし、ひとしきり現実打ちのめされた徹であつたが、その絶望は今や日々の糧である。

——このままでは済ませない。済ませてやれるはずがないのだ。

奴らは最早同胞などではなく、徹にとつて明確な敵である。地中深くで蠢き、蓄積され、吐き出され続けたこの怨念が、地上に噴出するまで後もう少し。この地下生活で培われたそのおぞましくも下劣な五年間は、徹がマスターロ

ッドの能力すべてを把握し、引き出し、そして広大なダンジョンに守られ肉棒で物事を考える無敵のエロ魔王と成り果てるのに十分な時間であつたのだ。

——マスターロッド。

大層な名前をしているが、いわゆる魔法の十徳シャベルである。どんな構造をしているのかはまったくの不明だが、用途に応じて長い柄の先がスコップ・ピッケル・楔・ドリル・ハンマー・鍬・タンパー・エンピ・トンボ・手押し車と多岐に変化する工具みたいな杖である。というか建設工具そのものであつた。もつともその形は使い手の性格や知識に強く影響されるらしく、特に決まった形はない。この世界では概念武器として遥か昔に絶大な権勢を誇つたということが前任者の手記に書かれている。

そんなマスターロッドの特性として、開拓した空間を自由に支配できるという効果があつた。つまりはマスターロッドで掘り進めた空間は使用者の思うままになるといふことである。空間はメートル単位の立方で一ブロックとされ、様々な効果のある地形を生み出すことができる。

例えば、『発熱』。

掘り当てた地下水脈から水を引き、この地形を經由させることでお湯にし、居住区に温水を引いたりもできる。

例えば、『変遷』。

支配下の地形に存在している微生物や、地中の虫などをモンスタージン化させる。生まれたモンスタージンは姿形だけでなく、人格や嗜好といった精神的なものも変化させることができる。ちなみに先ほどのオナホール用のスライムもこの効果で生み出されたものである。

例えば、『促進』。

支配下にある地形に居る生物や植物を巨大化させることができる。その地形に接している限り、効果のある範囲以上の大きさに成長させることも可能。

しかし、マスターロッドの使い手である徹は史上稀に見る鬱屈した動機と青臭い童貞信念にてダンジョンを建造していたので、通過しただけで尿意を催す『お漏らし』ブロックや、思わず乳首やクリトリスが立つて衣服に擦れる『隆起』ブロック、さらに身につけている下着がワンサイズ自動的に小さくなる『伸縮』ブロックなど、くだらないギミックが至る所に備え付けられていた。

その上、他人に邪魔をされたくないという童貞の趣向がふんだんに反映され、開拓した領域には侵入権の設定が可

能である。徹が許可しない限りは、マスターロッドで開拓した領域にはあらゆる物質は入れないという、反則概念武装であった。

それはこのマスターロッドがダンジョンごと封印された一番の理由である。

——干渉できないものであるならばその領域ごと封印するべし。

実際徹が最初に目覚めた居住区画は現迷宮では最深部であるが、その場所よりも地下には、以前マスターロッドが使われて造られた領域が広がっていた。当時の封印者に念入りに土を被せられ、魔法によりさらに地中に落ち込まされて、マスターロッドは地中深くに封印されることとなったのだ。このような封印手法がとられたのは、支配領域を広げるためには、その持ち主が自らその領域を拡張しなければならぬといった制約があったからである。

だがしかし、新井徹には時間があった。そしてやるべき目的があった。彼を支え続けた煩惱は五年間という期間をもって、彼に広大で強力な支配領域と無駄に強靱な足腰を与えてしまった。

そして今、新井徹の煩惱ならぬ煩念が成就する。地上への道を塞ぐ最後の太岩をマスターロッドで叩き割った時、彼の体をこの世界の太陽が初めて照らし出す。

「ふは、ふはははは、待っている!! すべてのおにやの娘は俺のものなのだ!!」

洞窟から盛大に噴出し、立ち上る漆黒の瘴気をバツクに、彼はこの世界に宣戦布告をする。

亀頭から溢れる歡喜の我慢汁が陽光に反射して、キラリと光る。そう、新井徹は童貞かつ変態かつ、裸族であった。



## 第一章 カイル君とシンシアさん

第一級のエンシエントダンジョン出現。徹がマスターロッドにより、地上へと繋げた瞬間、今まで燻り、溜まっていたダンジョン内の瘴気が黒煙となって天高く立ち上った。その話題は瞬く間に世の中を席捲し、冒険者達を近くの拠点へと誘う。

ダンジョンは地上と接続された折に『瘴気煙』と呼ばれる黒い煙を噴出させ、視界の確保もままならない。そして、『瘴気煙』の期間が長ければ長いほど広く、広大なダンジョンであることを証明し、その中には希少鉱物や魔物が期待できるのである。いつの世も、人々を動かすのは欲である。つまるところ、大抵の欲を叶えることができる銭金のためには人は動く。この世界もご多分に漏れず、その法則に当てはまる。

徹はまず餌を撒くことにした。せっかく自分の有利なフィールドがあるのだから、まずはお客様を引き込まなくては話にならない。地下一階から四階の階層は横に広く分岐を多くし、最奥に変遷ブロックを設置して大岩を置く。大岩は常に変化し続け、その身をレアな鉱石へと変えていく

だろう。あえて強いモンスターは配置しない。いくつか設置した大岩がなくなる頃にはこのダンジョンは『おいしい』という噂が広がるだろう。

本番は地下五階以降である。

通常のダンジョン探索の常識ならば、深くなればなるほどより『おいしく』なるのがセオリーである。もちろんそのセオリーの通りに徹はおいしいお宝を設置する。ただしこの地下五階への侵入は選ばれた者しかできない。なぜならば徹がマスターロッドの能力を使い、侵入条件を設定してあるのだ。

まず地下五階への階段は『一定の鉱石を採掘した者』しか通れないという仕組みになっている。より欲深い者をより深みに引きずり込むといえばもっともらしく聞こえるかもしれないが、徹の本音はかなりエロいこととするから前金として儲けさせてあげれば多少の罪悪感はあるという、身も蓋もない都合であった。

地下五階の構造は基本的に一本道である。直線通路に規則的な横道。横道は通路から奥まで見えるようにレイアウトされている。

そこには予め変遷により生み出しておいたレアな鉱石が設置してあるのだ。それは歪なまでにわざとらしいお宝展

示室。誰が見ても罫があるとわかる構造。だが冒険者達は止まらないだろう。富はもう目の前にあるのだ。

そして横道にもきつちりとマスターロッドにより、入場制限がされていった。例えば、横道の一つは四つのブロックに分かれており、

【第一ブロック】

・入場制限（女性のみ）

・入場制限（一人）

・退場制限（鉱石と一緒にでなければ退場できない）

【第二ブロック】…乳首／クリ勃起<sup>ぼっき</sup>床

・入場制限（スカート着用のみ）

【第三ブロック】…お漏らし床

・入場制限（下着着用不可）

【第四ブロック】…触手スイッチ

・入場制限（触手愛撫【三本】三十分間）

・退場制限（触手愛撫【五本】三十分間）

と、なっている。つまりこの道は、女の子が一人でスカート着用をしたまま、乳首とクリをピンピンにさせながら、尿意に耐えた上で、仕方なく下着を脱いでスカートをたく

し上げながら触手に股間を往復合わせて六十分間<sup>もてあそ</sup>弄ばれ続けるという、まさに童貞が考える妄想そのものであった。しかも一度入ればこの工程を完遂しない限りは決して外へは出られないのだ。

もし、失敗した場合は、徹の登場である。ダンジョンに潜るリスクとして、獲物は捕らえられ、彼が飽きるまで犯し尽くされる運命が待っている。

「うん、我ながらこの構成はイタイな、だがそれがいい」  
何故このような形にしたかという点、もちろんそれは遠視投影による録画と再生を楽しむためである。

「それに、もしカップルで来たりしたら入場制限の壁越しに上映会なんてのも楽しそうだしね。……いつそ第一ブロック越しに無理やり目の前で犯すのもいいかな、うへへへ……」

妄想が高ぶり、オナホール用のスライムに徹が手を伸ばそうとした瞬間、おもむろに遠視投影の魔法が起動する。地下五階到達冒険者第一号である。一人はまだ幼さの残る青年。軽装備ではあるが、大きな盾と騎士剣を所持していた。もう一人は女である。修道服に長い金髪、ちよつとだけ大人の雰囲気があるお姉さん系であった。清楚な修道服に隠しきれないラインが実に股間にくる美人お姉様である。

そこまで確認した所で徹は遠視投影をズームさせる。おっぱい良し、お尻良し、さらにふりふりと揺れる腰のくびれがとても悩ましい。

「二人パーティーで騎士とプリーストか……、うん、王道カップル爆発しろ」

そう呟き、徹はマスターロッドを起動させた。ついでにチンポの角度も四十五度ぐらい上昇する。

欲望開放時間である。

どことなく幼さが残る騎士装備の男と、清楚なプリーストの馴れ初めは実に一般的であった。村に突如生まれた天才少年。その光り輝くテンプレ人生を彼女は一番近くで見育ててきた。彼の両親が不幸にも盗賊に殺されて、彼女の家に引き取られてから、幼馴染みとして、時には姉のように接してきた彼女達の関係は今まさに蜜月の時を迎えようとしている。カイル十七歳、シンシア二十一歳。

彼らの人生はこのまま順調に行けば、このダンジョンでひとヤマ当てたことを契機として結婚というゴールを迎える。もしくはこのダンジョン探索中に二人の仲が進展するイベントが起き、幼馴染み以上恋人未満という曖昧な関係が崩れ、晴れて新しい関係になることだろう。

しかし、このダンジョンに入ってしまったのが運の尽き

である。

「あー、修道服って露出少ないのになんでこんなにえろいのかなー？ このケツたまらんなー、おっぱい柔らかそうだしー、この腰つきがなんともいえん、指でつんつんしたい、腰からお尻にかけて頬で撫で回したい……」

遠視投影の魔法で、徹は舐め回すように彼女の体を見ながら呟いた。そして、どんな声をしているのかなーと、徹は遠視投影のポリウムを上げると。

「大丈夫？ しー姉え、疲れてない？」

「うん、平気、ふふっ」

「な、なにおかしいのさ」

「ううん、あのカイルに守られているなんて、ちよつと不思議」

「お……ぼ、僕だって強くなつたんだ、む、昔とは違うんだからな」

「うん、びつくりした。さつきはありがとう。カイルももう大人なのね……、ちよつぱりドキツとしちゃつた」

「……お、おう」

「……ね、だからもつと近くによつていい？」

シンシアの指がカイルの指に搦められ、そして彼の腕ごと胸へ抱くように腕を組む。形の良い胸がカイルの肘に当

たりぶによんと柔らかく変形する。彼女は赤面しつつも憧憬の眼差しを彼に向けた。

「わ、しー姉えその、あ、当たってるんだけど」  
シンシアの行動にカイルは慌てるが、

「うふふ、嫌なの？」

と、きゅつと彼女は腕に力を入れる。

「い、嫌じゃないけどさ」

そう照れつつも赤面する彼を、嬉しそうに彼女は見つめ返す。

「ごっぱああああああああああああああああああああああああああああああ!! なんじやこのリア充わああああああああああああああああああああああああああ!!」

そのやり取りを見て、徹は遠視投影の前で盛大に吐血した。

「な、なんだ。なんなんだ、この破壊力は……!! テンプレ展開ってレベルじゃねーぞこれ!! 人がスライムのオナホ用途について論文書けるぐらい研究しているのを他所に、外の世界ではなんてことが起きていたんだ……」

口を拭い息を整え、徹は尚も呟く。

「おおう……、口惜しいのう、口惜しいのう……、俺も……俺も何かが違うっていればあんな人生を!! 光溢れる、王

道人生を歩めたのかああああああああああああ!!」

まさに自分が求めていた人生を改めて目の前で展開されることで、徹の精神はいたく傷つき、そしてその心をズタズタにされた。

「ふは、ふははははは」

だが、しかしズタボロになった徹の精神構造が化学変化を起こし、自我防御のために正当性を作り出し、新たな心理の鉄塔が建築され、電波理論を撒き散らす。

「逆に考えるんだ。そのおっぱいを!! そのお尻を!! その幼馴染み系お姉様を!! むしろ、そこまで育ててくれてアリガトウと!!」

彼の心のチンポがいきり勃ち、物理的なチンポもいきり勃つ。

「ふははは、カイル君とのお姉さんよ、君達の愛情を劣情と欲情をもつて試してやろう!! 報酬は貴様らの輝かしい未来、チップは主におっぱいとお尻と、——後いろいろなかだ!!」

徹が叫ぶ中、遠視投影にはシンシアが横道を覗き込む様子が映し出されていた。そこは覚醒の横道と徹が名付けたギミックがある場所である。

入口の前で彼らは少し迷っていた。それは横道の奥に目

当てのものを上回るほどの鉱石を見つけたからである。

それは光り輝く抗魔水晶であった。

抗魔水晶はその名の通り魔力に強い耐性を持つ鉱石である。その特性を生かし、マジックアイテムの制御や、対魔防具としての需要が高い。しかし市場に出回っている鉱石の純度は五十パーセントがいい所で、それが七十パーセントともなれば家が一件土地付きで買えるほどの価値があった。

「ここ、何か見えない壁がある」

「あら、でも私通れるわよ」

パントマイムのようにベタベタと見えない壁を触るカイルを横目に、シンシアは手をひらひらさせながら往復させた。

「地下五階からは入場制限があるみたいね。カイルが入れなくて私が入れるって所を見ると、女の子しか入れないのかも」

そして二人は奥に設置されている抗魔水晶を見る。

「畏かな」

「畏ね」

二人は同時に呟いた。入場制限されたエリアに高価な報酬。誰がどう見ても怪しき満点の畏であった。しかし、二

人はこの場を去ろうともせず考察を進める。そう、お宝は目の前にあるのだ。当然畏があるならばなんとかしようという思考になる。

「でも、このダンジョンって基本モンスターが居ないよね、今までだって外から入り込んだ奴しか見たことないし」

とカイルがシンシアに話しかける。

「上の階でもいろんな謎解きがあったわね、それでも失敗したら外に放り出されるレベル」

そして、彼女がカイルに同意を求めるように頷く。

「試してみよう」

「試してみよう」

その瞬間彼らは、決して戻れない一步を踏み出してしまったのだ。

シンシアの全身が、第一ブロックへと侵入する。

(ふいふいふいふいふいふいっしゅ!!)

その直ぐ下の横道の管理層で、徹は歓喜の声を心の中であげるのであった。



シンシアが第一ブロックに侵入すると、遠視投影が発動

し、彼女の前にクエスト情報が表示された。

【覚醒の横道】…ブロック踏破クエストスタート

【クリア条件】

・抗魔水晶と共に第一ブロックを脱出。

【制限】

・入場制限（女性のみ）

・入場制限（一人）

・退場制限（鉱石と一緒でなければ退場できない）

・時間制限（なし）

【報酬】抗魔水晶（純度百パーセント）

【ブロック数】五つ

・報酬を確保したまま、第一ブロックを脱出することでクリアとなります。

・ギブアップの場合、挑戦者にはペナルティが課せられます。

「しー姉え!!」

クリアまで脱出不可。その条件を見た瞬間、カイルがシンシアに向かって叫ぶ。剣や魔法で障壁を突破しようとしたが、当然ながらマスターロッドの概念結界はびくともしなかつた。

「……大丈夫、無理だったらギブアップするから、ね？」  
彼に微笑みながらも、覚悟を決めた様子で彼女は奥へ向く。

【覚醒の横道 第二ブロック侵入クエストが始まります、挑戦者が指定の椅子に三十分着席することで侵入が可能になります】

シンシアの眼前に第二ブロックへの侵入条件が示されたと同時にガコンと床が開き、この場に不似合いな無骨な椅子が地下から現れた。椅子には手枷と足枷がついており、碌な目的のために造られたのではないことが容易に窺える。唯一の救いといえば、背もたれが大きく、椅子の方向が奥を向いているのでカイルにその姿を見られないことであつた。

【第二ブロック侵入クエスト】ノーマル床・入場制限（ギミック椅子 三十分）

不気味に目の前に浮く遠視投影を気にしながら、シンシアはロッドで椅子をつついたり、周囲を入念にしらべた後、意を決して椅子へと座る。

「……何も……起きない？」

身を強ばらせながらも椅子に座ったまま周囲を警戒する彼女の目の前にヴォンと、遠視投影の魔法が移動する。

【指定の椅子は素肌と接触してないと動作しません】

その内容にシンシアは息を呑む。どうやら本当にこの椅子は碌でもないものらしい。この分だとギブアップ時のペナルティというのもあまり彼女にとっては良いものではないさそうだと溜息をついた。椅子の背もたれから首を出すようにして後方を振り返る。そこには心配そうにこちらを見るカイルが居た。——大丈夫よ。笑顔でシンシアは彼に向けて手を振った。

（——この背もたれが大きくて良かったわ）

シンシアは聖職者である前に、一人の女である。聖職者であるが故、肉体関係はもちろんない。しかし、この年齢にもなればそれなりに性に対する知識もそれに対する欲も人並みにある。心が欲していなくても体がどうにもならなくなることもなんて普通だ。カイルを思っただけでこっそり慰める夜も少なくない。だがしかし、そんな自分をまだ彼に見せる勇気はない。だから彼女は、カイルと結婚することを夢見ていた。聖職者でも配偶者との肉体関係は許され

ている。今回のダンジョン攻略はそのための資金稼ぎであった。

シンシアは足首まで覆っている黒い修道服の裾を持ち上げる。ひんやりとした外気が内ももを撫でる。ぞくりとした感覚。普段は外気と接しない臀部（お尻）に感じる冷やかな風を味わいながら、シンシアは仕方なさそうに修道服を腰の高さまでたくし上げ、勇気をふり絞り椅子へと腰を下ろした。

【着席部に熱源を感知。第二ブロック侵入クエストは接触面が離れると時間がリセットされます。セーフティを利用しますか？】

「……セーフティ？」

【セーフティを利用しますか？】

「……いらぬわ」

【第二ブロック侵入クエスト・カウントスタート】

【29…59】

【29…58】

【29…57】

カウントスタートの合図と共に、シンシアの目の前に映された遠視投影の時間表示がカウントダウンを始める。そしてかしゅん、と椅子のギミックが作動した。椅子とお尻

との接触面がガクンと二十センチメートルほど下がりが、彼女はお尻だけ椅子の窪みにはまり込む姿勢になった。

「ひゃん」

反射的に両手をつっ張り、シンシアは立ち上がる。

【接触面が離れました。カウントがリセットされます。再度着席するとカウンターが作動いたします。セーフティーを利用すると、強制的にクエストを継続することが可能です】

遠視投影の文字を見ながら、彼女は椅子に付いている手枷と足枷を恨めしく眺める。

「手枷と足枷ね……、ほんと悪趣味だわ……」

【30000】

止まったままのカウンターを見る。こうしていても現状が変わるわけでもなく、シンシアはもう一度椅子に座るのであった。

【第二ブロック侵入クエスト・カウントスタート】

【29059】

【29058】

【29057】

二回目もシンシアは手枷と足枷は使わなかった。未だ何をされるかわからない状況で身動きが取れなくなる状況を

避けるためである。

【29055】

【視覚制限が発動します、ギミック部分、具体的にはデフォルトの着席位置から下降した位置の状況を視認することができません】

遠視投影から流れ出るメッセージにつられ、シンシアが下を見ると腰回りに黒い霧がまとわりついていた。彼女の太ももとお尻は黒い霧で覆われた椅子の窪みにすっぽりはまり込む形になっており、そこから膝や上体がにゅっと出ている格好である。

（う……、恥ずかしい……、でもカイルのためだもの、私  
が頑張らなくちゃ）

（こ、これはたまらんなあ……）

シンシアが恥ずかしさに耐えている頃、徹の目の前には、彼女の形の良いお尻と太ももと股間があった。手元の遠視投影を見れば、顔を赤らめてギミック椅子に座っている様子が鮮明に表示されている。徹が居る位置はギミック椅子の中である。横道管理層からギミック椅子へと回り込み、今まさにシンシアの下半身と対面した所であった。そして、徹はばんばん、と柏手を打つと、目の前のつややかな彼女の太ももへと手を伸ばす。



さわりさわり、とシンシアの太ももが擦られる。

「ひ……っ」

シンシアは自らの太ももを無骨な何かが撫で回しているのを感じ取り、思わず嫌悪の声をあげてしまう。カイルの手とはまったく異なる太く硬い指が、さわり、さわり、と内ももをしつくく撫で回し、時折ショーツに沿って指を這わせる。自分の下半身を誰かが触っている。そんな嫌悪感と、他人に太ももを撫でられるという初めての感覚。

「……んっ、ん、……やあ」

まるで品定めをするようないやらしく、ねちっこい触り方。股間に潜む何かに内ももを撫でられる度にぞくり、ぞくり、と背筋に電気のような刺激が走ってしまう。

「……やだ、やあ、……あんっ」

それは、彼女にとつて初めての感覚であつた。そうこうしている内に、徹の手は彼女の太ももをやわやわと揉み始めてしまう。表面的な刺激から、体の芯に溜まるようなむず痒い感覚が次第にシンシアの下腹部に蓄積していく。

「んっ……あっ」

（うわあ、うわあ、かわいい!! この子かわいい!!）

無防備な下半身を撫で回し、羞恥に耐える女の子を好き放題にできるという状況に、徹の煩惱はどんどんエスカレ

ートしていった。

たわわに育ち丸みのあるシンシアのお尻を包むショーツに手を置き、指を引つ掛ける。そして、クイツ、クイツ、とショーツを上へ上へと食い込ませる。

「ふあ、……やあッ、あんっ、んっ、ん……っ」

（そーれ、そーれ、くい、くい、くい、とな）

「んっ、ん……っ、んっ、ん……っ」

（くい、くい、くい、くいーっとお）

遠視投影の中で小指を咥えながら、必死に声押し殺すシンシア。それに構わず、徹は猿のような性急さで彼女のショーツを摘み上げる。

「ふ、ん……っ、んっ、ふ……っ」

太ももを撫で回され、ショーツを股間に食い込まされ、そして継続的刺激を与えられつつも彼女はカウントを確認する。

【16・59】

もうすぐ半分だ。この程度の辱めの一つ試練が終わるならと、シンシアは必死で声を潜める。だが、彼女の下半身にショーツが食い込みきること、徹の目の前に花弁の形がはつきりと象られてしまっている事実を、彼女は知らない。ショーツの上下に合わせてゆさゆさと徹を誘惑するシ

ンシアの性器。徹の溜まりに溜まりまくった性欲が、それを見逃すはずがないのである。

「ふあ」

びくん、とシンシアの体が大きく跳ねた。突如彼女の下半身から伝わってくる甘美な快感を、体を抱きかかえるようにして必死に堪える。甘噛みあまがしていた小指が口元から離れ、つーつと、糸を垂らす。

「……あつ……あつ……あつ……あつ……だ……だ……だ……だ……だ……あつ……ふあ♥」

ギミック椅子の中では、シンシアのクリトリスを人差し指と親指で丹念に撫でたり捏ね回している徹が居た。彼がきゅつと彼女の突起を摘んだり、押しつぶしたりする度に、遠視投影に映る彼女の表情が困惑と歓喜でくると変わると変わる様子に、徹は至極興奮を覚えてしまった。人に性的に何かを強いる行為はなんて気持ちがいいんだろうと。

そんなシンシアの表情を見ながら、さらに徹は丹念にクリトリスを揉み揉みする。次第に彼女のショーツの中でくつちやくつちやくと、花卉が音を立て始めてしまう。しかし、それには目もくれず、徹はクリトリスを揉み込み、埋没させ、リズミカルに摘んで捻りひね、そして指先で強く弾き続ける。

「……あつ!! ……あつ!! ……あん!! ……やん!! やだ……、やだあ、来ちゃう、ああん!!」

(うへへ、かわいいなあ。あのカイル君には弄いじってもらってなかったのかねえ。なんにせよ、女の子の体いじって、こんなに柔らかくて、温かくて)

顔を近づけ、徹の舌がシンシアの太ももをぬろん、と舐め上げた。

(すぐく、興奮する)

「ひゃん!!」

その瞬間、シンシアの股間が徹の目の前から消える。彼女は未だ体験したことのない、男の舌の感覚に思わず、両の手を突っ張り、席を立つてしまったのだ。

【接触面が離れました、カウントがリセットされます。再度着席するとカウンターが作動いたします。セーフティーを利用すると、強制的にクエストを継続することが可能です】

「あ……」

【3000】

メッセージと共に目の前に映し出された、リセットされたカウンターを見て、シンシアは呆然ぼうぜんとする。

「また……、座らなきや……」



三回目の着席、再び徹の目の前に現れたシンシアの下半身。彼がつん、と再び指でクリトリスをつつくと、彼女は自ら少しだけ脚を開いた。再びくによくにやと股間を掻き回す徹の指を受け入れていることに自覚がないまま股を開いてしまふ。

——この事実にはまだ彼女は気づけない。

くちゅつくちゅ。くちゅくちゅくちゅつと、辺りに響く淫靡いんぴな音。

「……うあ……んっ、……ああん」

徹は愛液でぐちゃぐちゃになったシンシアのショーツを横に掻き分け、くちやり、くちやりと、いやらしく舐め上げる。それだけではない。五年間の掘削作業で太く硬く変化した彼の指が、彼女の花卉の入口をゆつくりと丹念に掻き回す。ぱつくりと開いた割れ目の縦筋に沿って指を小刻みに震わせながら往復させると、その度に花卉はぐちゅりぐちゅりと歓喜の汁をしとどに垂らすのであった。

「ひう……っ……!!」

シンシアの柔らかい股間の粘膜と徹の節ばった指のなんと相性のいいことか。ぐにやんぐにやんと彼女の股間は押

せば押すほど形を歪め、掻き回せば掻き回すほど、柔らかく受け入れてしまふ。その証として、彼女の股間からはまだかつてないほどの愛液がどろどろと溢れていた。徹はベトベトになったその指で、硬く尖ったクリトリスに愛液をまぶしてやる。

刺激に飢えているシンシアの肉芽は愛液を塗られると、ひくひくと勃起して嬉しそうにそそり立ち、てらてらと光を反射した。その度にびくん、びくん、と体が震えて力が入るのがわかる。だが、彼女に拒絶はない。この後に彼が何をしてくるか、もうわかっているからである。期待とまではないかない消極的で受動的な無抵抗。その行動が彼女の未来に良いことなのか悪いことなのかはわからないが、ただ今はこうして黙って股を開くしかないのだ。

「——ふああっ、あっ、あっ、だ……めっ……それ……、だめ……っ……ああああ!!」

そして徹は滑りの良くなったシンシアのクリトリスを指で弾き出す。先ほどから何度も行われているいやらしくて刺激的な行為。ぴちぴちと、卑猥な音が彼女の耳元に到達する。股間についているエッチな部分がすごい、これすごいよと喜びを伝えてくる。

(気持ちいい……自分でするよりずっと気持ちいい……)

繰り返される愛撫の中、シンシアの思考は桃色に染まっていた。クリトリスへの責めを何回も徹に繰り返され、未経験の刺激に溺れていく。

ちなみに徹がクリトリスばかり責めているのは、別にクリフェチが理由ではない。シンシアは手間暇かけて自分のダンジョンへ引き込んだ獲物第一号であると同時に、徹の人生で初めての女の子であった。中途半端に味わうという後悔だけは絶対したくなかったのだ。しゃぶり尽くすなら体も心もしゃぶり尽くす。それが彼の矜持<sup>（尊厳）</sup>である。

### 【05・03】

——くちやり、びちゅ、びちや、くちゅくちゅ、くちやくちや

だらしなく囁る股間の鳴き声を背景に、シンシアは快感に耐えていた。

（カイル、待って、シンシアお姉ちゃんが、頑張るから、カイルのために、頑張るから……）

とろんとした表情で遠視投影に映る彼女を見ながら徹は、（この子、まだ余裕があるな……）

と、思った。

このままクリトリスを責め続ければシンシアがイクのはわかる。だがしかし、それは徹の負けである気がした。彼

女の本気の快感を掘り当て、心を虜にしなければ意味がない。そんな使命感にも似た、はた迷惑な電波思考が彼の頭を支配する。

### 【03・53】

とりあえず徹に残された時間も後僅か<sup>（わず）</sup>である。せっかくだからクリ責めの仕上げをしてあげようと、シンシアの愛液でてらてらと輝く突起へ、その舌を伸ばし——。

ぬろん、と柔らかい何かが彼女のクリトリスを弄び始めた時、彼女はまた反射的に椅子から立ち上がりそうになるのを必死で耐えた。体を強ばらせ、両の手で体を抱きすくめながらも、なんとか椅子から立つてしまうことを耐えようとする。

（何、なに……これ。柔らかくて温かい何かが、私の……私の、あそこをぬろんって、ちろちろって……はあ♥ちゅばって、ちゅばあって……）

ヌラヌラとクリを這い回り、ぞくぞくと背筋を駆け上がる快感。文字通り来ちゃう快感をシンシアは懸命に押し殺していた。ぬらり、ぬらり、ぬろん、ぬろん、と押し当てるように刺激され、時にはちろちろ脇をくすぐられて。シンシアはすぐん、すぐんと津波のように襲い来る感覚に必死で耐える。しかし彼女の体はその柔らかい感覚を少しで

も取り込もうと彼女の意に反してしまふ。絶え間ない責め苦を受けているクリトリスは、もうどうしようもなく硬くそそり立っていた。

【00…59】

【00…58】

「——んっ、……あつ……あん!! はあ…はあ…あ、と少しい……ん、ああんっ」

(ふう……大丈夫、これくらいなら……なんてことない……、私は……カイルのために、耐え切つてみせる!!)

【00…49】

その時である。

ちゅくちゅく、とシンシアの股間から漏れていたその淫らな音が突如方向性を変えた。

——ちゅぼちゅぼ、ちゅるる、ぢゅるるるるる

それは徹が口を窄めてシンシアのクリトリスを口に含み、啜る音である。

——ぢゅる、ぢゅるる、——ちゅぼん、ちゅ、ちゅぼん  
それは徹が啜つてこりこりとなつたクリトリスを口から

勢い良く弾き出した音である。

生温かい吐息がシンシアの股間に噴きかけられる。熱の籠もつた、淫靡な溜息。まるでおいしかったよ、と言わん

ばかりのぬるくていやらしい吐息。

「……あ……ああ、……あ、ああ……」

——てろてろ、ちゅつぽちゅつぽ、ぢゅるるるる

間髪入れず続いたその音は徹が舌先で硬く尖つたクリトリスをぶるぶると震わせる音である。

(あああ、……わたし、……わたしっ!! ——なんてことなの!!)

シンシアの体が徹の愛撫に合わせてびくんびくんと波打つ。だがしかし、彼女の心を震わせているのはもつと別の事実であつた。

——れろん、れろん、と口の中で硬く強ばつた自分のクリトリスを転がされる音と快感。

——はむはむと勃起したクリトリスを唇で押しつぶされる音と快感。

——舌先でちろちろとクリトリスをつつかれたり、弾かれたりする音と快感。

——窄めた口先に含まれ、勢いよくクリトリスを啜られる音と快感。

——舌で搦め捕られて、前歯と舌でクリトリスを甘噛みされる音と快感。

それは、感覚と音による行為の想起である。自分が今ど

んなことをされているのか耳と股間で意識させられる度に、シンシアの花弁はぷしゃつと愛液を撒き散らし、震えさせられる。

——くちゅくちゅ、ぬろん

——その花弁にまわりついた愛液を、徹の舌で掬われて丁寧にクリトリスに愛液まぶされながら、また弄ばれる。今まで黒い霧に覆われて、どこか他人ごとの気分で快楽に身を任せていたシンシアにとつて、徹がわざとらしく立てた愛撫の音は、彼女の脳裏に明確な股間の情景を映し出させるトリガーとなった。

（わたし、カイルでもない、知らない誰かに、あそこを、いいように弄ばれて——）

——ぴちゃぴちゃぴちゃぴちゃぴちゃぴちゃぴちゃぴちゃ  
やぴちゃぴちゃぴちゃぴちゃ

（こんなにあそこを硬くして……喜んでるなんて——!!）

——ぴちゃぴちゃぴちゃぴちゃぴちゃぴちゃぴちゃぴちゃ  
やぴちゃぴちゃぴちゃぴちゃ

どうしようもなくつんつんに勃起したシンシアのクリトリスが、徹の舌に連続して弾かれ、打ち震える。

「ふああああああ、でも気持ちいの、だめ、だめだめ

——いやああああああああああああああ♥!!——

思い人でもない、どこかの馬の骨かもわからない誰かに、脚を広げ股をいのように舌で弄ばれるという光景を頭の中で浮かべてしまった時、シンシアはいつも一人で行っている自慰では決して辿り着けない快感の次元まで連れていかれた。

「ああああん、だめええええ!!」

びくんびくん、とシンシアの体が痙攣し、その度に花卉から生温かい愛液がびゅつびゅと噴き出し、徹の顔にかかる。彼は遠視投影で震える彼女の顔を見ながら歡喜に震えた。

（おおおおお、すげえ、うわあ、あのすましたお姉さんが、涎垂らしてびくびくしてる!!）

「やだあああ、これ、止まらない……ひああ!! ……あうんっ!!」

びゅーびゅーと、潮を吹き続けるシンシアの花卉。ガクガクと愛液を噴出する度にきゅつと硬くなっている。尚もツンと勃っているクリトリスを徹は優しくまた舌で舐つてあげるのであった。

【00…00】

ちゅばちゅばと、周囲に響く徹の後始末の愛撫の音。クリトリスを勃起させたまま、名残惜しそうにシンシアが席

を立つのは、その行為が始まってから五分後のことである。



先ほど第二ブロックで盛大に徹の舌で散々にイカされた後、ぐったりしている間に再びねちつくくりトリスを舌で舐らされたシンシア。そのため、彼女の体には再び劣情の種火が灯ってしまった。

(……人が動けないのをいいことに、あんな……、あんなことをするなんて)

シンシアが絶頂を迎えると共に、彼女の性器はその残り火を処理しようとひくつき、痙攣と力みに合わせて愛液を小まめにびゅっびゅと放出していた。その度に花卉にはねつとりと愛液がまとわりつき、そして股間周りに水たまりを作っていくという案配である。

「はあ……っ、はあ……、っん……っ、ふああ……」

彼女はその快楽の余韻に浸り、とろんとその精神を外に手放してしまっていた。だから腰元でこそごとと誰かが動き、彼女の腰の下から手を回されて下半身を固定されるまで、意識はまったくの無防備であったのだ。

その頃、ギミック椅子の下で徹は自分の前にあるシンシ

アのあられもない股間を凝視し、感動していた。

(俺の愛撫でこんなにベトベトになるまで感じてくれるなんて)

これはアフターサービスしてあげねば、と徹はひくひく震えるシンシアの下半身を抱え込む。そして絶頂の余韻に震える彼女のクリトリスをちよんちよんと舌先でつついたのだ。

「……っ、……ふあっ!!」

彼女が声をあげると同時に、ぶしゅつと花卉から愛液が迸る。そして徹はそれを確認すると、シンシアの濡れそぼった花卉に優しくしゃぶりつく。

——ちゆる、ぬろ、ごくん、……ずず、ごくん

(やだ……、なにこれ……、吸われて、やあん……)

徹はクリトリスを手で柔らかくゆつくりと皮の上から扱きながら、花卉に溢れる蜜を吸い取り飲み込んでいく。それは奉仕的な後始末クンニである。チラリと遠視投影を見れば、そこには羞恥を感じつつも指を咥え、クリトリスを採まれる度に体を震わせる彼女の顔があった。

(——うむ、エロかわいい。眼福なり)

五分後、あらかた舐め取った後で、すっきりしよばくれ



た突起をまた口に含んで遊んでいたりしたのだが、席を立たれてしまう。シンシアが立ち上がる気配を察すると、徹は下半身を固定していた手を離し、代わりに舌で彼女のひだひだを名残惜しそうにくちゅくちゅと掻き回してあげるのであった。

それは、——物足りないならまだまだいじめてあげるよ、という徹からのメッセージである。

クリへの刺激から、花弁を悩ましく掻き回される快感の移行に、シンシアは二秒ほどその腰を止めてしまう。その間、ちゅくちゅくと動き回る徹の舌から送られる快感に、もうちよつとアソコを掻き回される感覚を味わいたいという気持ちが生まれてしまう。しかし彼女はその迷いをふりきるように立ち上がった。

席を立つ時に彼女のショーツがずりりとその足から抜け落ちる。彼女の愛液にまみれ、ずっしりと重くなったそれを徹は嬉しそうに懐にしまう。

（ふおおお、戦利品、ゲットだぜ!! いやあ、この子かわいいなあ!! くんかくんか!!）

彼女は席から立ち上がり、腰までたくし上げたスカートをすんと落とし身なりを確認する。恐る恐る背もたれの向こうを見ると、カイルが心配そうな顔をしてこちらを見

ていた。

（——どういうこと?）

最後の方はあられもなく乱れ声をあげたはずなのだが、シンシアの目から見てカイルの様子はいつもと変わらないようであった。心の中で訝しむ彼女の目の前に小型の遠視投影が現れる。

【声はカットしておいたよ、これからの試練も安心して乱れてね☆】

その軽いノリにシンシアは思わず遠視投影を殴りそうになつてしまうが、すんでの所でそれを止めた。彼女は考えただのだ。——この調子で試練とやらが続くなら命の心配はない。カイルにもはしたない自分がバレることはない。ならば自分さえこの一時を耐えれば、目的の抗魔水晶が手に入るのではないか。処女を散らされるのは流石さすがに嫌だが、試練の内容がこの第二ブロック侵入クエストと同じ形式ならば、完全に無理だと思つた際には最悪リタイアできるし、何より試練のクリア条件は事前に提示されるのである。

——ならば、とりあえず次の試練も受けてみてはどうか、と。

「くつくつ、そんな考えしてる顔に見えるねえ、——シンシアちゃん」

入口で待ちぼうけしているカイルに『大丈夫余裕よ』と、軽くガッツポーズするシンシアを遠視投影越しに見ながら、徹は次のブロックへと移動するのであった。

「最後までその元気が続くかなー？」

【第二ブロック侵入ミッションクリア。おめでとうございます、第二ブロックへの侵入を許可します。ブロック障壁の前までお進みください。ブロック障壁前まで進むと、第三ブロック侵入ミッションの説明が出現します】

(……やだ、なんかまだちよつと変な感じだわ)

股間にまとわりつく柔らかい修道服の感覚に、シンシアは少し歩きづらそうに第三ブロックの境界へと歩を進めた。先の侵入クエストでショーツをギミック椅子に置いてきてしまったので、今彼女の下半身を足首まですっぽりと収めているタイトスカート形式の修道服の中身は生まれたままの姿である。

【覚醒の横道 第三ブロックの侵入クエストが始まります。挑戦者の性器から垂らされる愛液が一定以上溜まると、障壁が解除されます】

目の前に現れる遠視投影の文字に対して、予想はしてい

たがあまりにもブレないこの支配者の方向性に、大きく溜息をつかされる。

(——でも、今度は弄られるとかなさそうだし、むしろ前の試練よりも楽かもしれない)

シンシアがそう思案していると、床がガコンと開き、ギミックが浮上する。そこには腰の高さぐらいまである階段があった。ただし、普通の階段と異なる箇所がいくつかある。階段の最上部は二股に分かれており、ご丁寧に足あとのマークが描かれていた。中心部は空洞になっており、そこにはガラス製の漏斗が設置されている。

さらにその下方にはガラス製の小瓶があり、小瓶の中ほどに赤いラインが引かれている。つまりはお立ち台プラス和式トイレのような装置であった。

(——前言撤回、もう何も言えないわ……)

これではまるでさらし者である。幸いにして観覧者はこの悪趣味なダンジョンマスターしかいないのが救いであるうか。オナニー台ともいべき悪趣味なその見てくれにシンシアは心の中で毒づくのであった。

【愛液の採集は指定の場所で行われますのでご注意ください。制限時間などはございません。ゆっくりとお楽しみください。それではスタートします】

採集装置の上に追記の説明が現れる。後ろに衝立が現れ、今回もシンシアの痴態が、カイルから見えるリスクは消えた。

「カイル!! ちょつと謎解きに時間掛かりそうだから、結界魔法張って待ってて、お願い!!」

シンシアが衝立から顔を覗かせ、入口のカイルへと叫んだ。どうやら喘ぎ声以外は普通に聞こえるようだ。彼は領き、荷物をその場に置いて拠点作りを始める。未だ不安そうなカイルから、『頑張って、しー姉え』と声が掛けられ、彼女は笑顔で返した。

そして、シンシアは振り返る。目の前にある採集装置。この迷宮の支配者は、きつと自分が脚を開き、しゃがみ込みながら卑しくも自ら性器を弄り、そして絶頂を迎える姿を楽しむつもりなのであろう。

彼女は想像する。自ら修道服をたくし上げ、自慰に耽り、丸出しにしたお尻をふりふりと震わせながら絶頂し、愛液を垂らす己の姿を。それはなんとも受け入れ難い光景であったが、

——しかし、それだけのことであった。

カイルには知られることはない。前回の試練のように誰かに好き放題弄ばれるわけでもない。ならばいつもの秘め

事と変わらないではないかと、シンシアは考えた。それぐらいで夢が叶うなら、彼との結婚生活の資金が手に入るなら、まだギブアップなどしなくてもいいのではないかと。そう決意を固めたシンシアを他所に、

「第一カメラ角度よりし、二カメラは顔をあつぷで、ここ大事よー? 三カメラはアソコと顔を同時に映して、四カメラは後ろから全体を、お尻を舐めあげるように。五カメラと六カメラは正面かな、おっぱいを中心に、後方に引く感じで——」

徹は管理層で趣味に勤しんでいた。

「さあ、録画RECしたあああああとう!!」

遠視投影に映るシンシアが階段を登り、マークに合わせ脚を開く。そしてするとするとスカートをたくし上げそのまましゃがみ込むと、自然に彼女の脚がM字に開き、白くまるいお尻と、先ほど散々徹に弄ばれた花弁が現れる。直に外気に触れ、きゅ、とひくつく様子が正確に録画されたのを確認すると満足気に頷いた。

【挑戦者を確認しました。姿勢サポート機能開始します】

和式トイレに座り込んだようなシンシアの各部を透명한魔法のギミックが下支えする。ふわりと、彼女の体から窮屈な負荷が消え、まるでベッドで寝ている時のように力を

入れなくても姿勢が保たれていた。

「……まったく、変な方向に至れり尽くせりなのね」

そう心の中で呟くと、自分が卑猥な格好をしていることを再認識してしまう。修道服は捲り上げられ、下半身は下着もつけず、丸出し状態。白い素肌がふるふる外気に晒されている。トイレの時だってこんな格好はしない。

「……んっ」

そんな、はしたない格好を自覚しながら、シンシアは自分の胸をゆさゆさと揉み始めるのであった。さっきのプロックでは決して弄ってもらえなかった胸。そう、彼女の胸は痺れるようなむず痒い感覚がずつと溜まっていたのだ。指を這わせれば、修道服越しでもはつきりとわかる凝り固まった乳首。手の平でさすり、手で揉み込みそして、服越しに摘んで、焦れたい感覚を昇華させる。

「ふあ、……んっ、すごい、……痺……れる、はあ……、あうん♥」

ツンツンに尖った乳首をどこかしら幼さが残るカイルに吸ってもらおう。それがいつもシンシアが思い浮かべる自慰のシチュエーションであった。ちゅつちゅちゅつちゅとおしゃぶりされながら、こりこりと思いい人に弄ってもらおうのだ。

「うふふ、……あんっ、もう、そんな強く吸っちゃだめ、……ゆつくり転がして、ね♥」

片方の手で胸を下から寄せて上げ、服に押し当てられた乳首を人差し指でコリコリと弄びながら、腰をくねらせる。(うわあ、シンシアちゃんは、結構性に対して貪欲なのかもなあ)

そんな彼女の様子を見ながら徹は思った。

シンシアはこの歳までずっと聖職者である。顔立ちは整っていたので言い寄る男は居たものの、その度に彼女はカイルをだしに交際や結婚の申し出を断っていた。しかし体と心は別物である。心はカイルで満足していても、体はそうはいかない。快感への渴望を密かに蓄積しながらも待っていたのだ。彼が一人前になるのを。年下であり、まだ駆け出しのカイルでは結婚しても生活がおぼつかない。かといってシンシアが養うというのもカイルのプライドを傷つけてしまう。そんな心を落ち着かせるために、ずっと自分で体を慰め続けていたのだ。

「カイルっ、カイルっ、好きっ、カイルになら何されてもいいの、はあ……はあ……♥シンシアお姉ちゃんはカイルのことが好きだから、乳首をこんなにはしたなくしちゃうの

——ああん!!」

M字開脚のまま、シンシアは服越しに両方の勃起した乳首を指でさすっていく。時折ぶにゅんと指を沈ませ、くくと乳首を転がす度に花卉がいやらしい潤いに満たされていく。

「んふ……あつ、やんつ、気持ちいい、カイルう……お姉ちゃんのはしたないところもつとお仕置きしてえ……♥」

そして左手で胸を揉みながら、彼女の右手が股間へと伸びて、クリトリスをいつもの調子でつん、とつつついた。

「——ひん♥」

それは予想外の激しい快感であった。いつもならつんつんと指先で弄び、その短くも芯に響く快感に酔いしれるのだが、指に返ってきた感触は、にゆるんである。当然のことながら、伝わってくる快感も、いつもの自慰行為を遥かに上回る衝撃であった。恐る恐る股間を覗き見れば、そこは蜜に溢れ、くちゅくちゅにほぐれた花卉が弄って、弄つてとひくついている。

「やだ、わたし……なんで？」

（そりゃ、アレだけ弄ってあげたからなあ……）

しみじみと管理層で、シンシアの痴態を徹は思い出した。そして考える、彼女は一途で素直で、エッチで素敵なお姉さんだと。ただしここから電波思考。こんなかわいくて食

べ頃のお姉さんは誰かがしつかりと食べてやらねばと、清く正しく捻じ曲がった笑いをあげる。その笑い声を背景に、遠視投影の中で彼女の指が再び動き出す。

「ふ あつ……ああ……やあ……つ、んつ、……あんつ……あつ、あつ——これ、気持ちいい、止まらない……はあはあ……止ま……らないつ——これすごい♥ 止まらない♥ きもちいのきもちいの、これ、きもちいの♥」

花卉の入口を掻き回しながら、指で愛液を掬い取り、勃起したクリトリスを指で弾いたり、摘んだり、奇しくもシンシアは無意識の内に徹にギミック椅子でされた責めと同じ行為を繰り返す。

「カイルう……、カイルう……あんつ、……お姉ちゃんの、シンシアお姉ちゃんはいやらしいこつちも吸ってほしいのつ、ふあ……あつ、ちゆるちゆる音を立てて吸ってほしいの♥」

ちゅくちゅくちゅく、ちゅくちゅくちゅく、とリズムカールに淫猥な音が周囲に響く。彼女はクリトリスから指を離し、二本の指で挟むように割れ目をきゅつと圧迫し、性器全体を揺するように前後に指を動かすと、花卉からいやらしく溢れた愛液がぼたぼたと垂れていく。

「ん ああ……、カイルう、——えつちなお姉ちゃんを

ゆるしてえ……つ、おっぱいだけじゃなくて、お姉ちゃんのアソコもちゅうちゅう吸って♥ お姉ちゃんのことなんか気にしなくていいから、いっぱい吸ってえ——ああん♥」

先ほどの試練と負けず劣らず硬く勃起したクリを、シンシアの愛液に濡れた中指が、引つ掻くように弾き出す。中指がクリトリスを激しく弄ぶ度に、彼女の肉芽はより、快感を得ようと硬くなるのであった。

「あああ……あつ……あつ、あそこかゆい、かゆいの。——カイルう、お姉ちゃんのおそこ痒いのお……あつあつ、気持ちいい♥ こんなのお……わたし……♥」

ピチピチピチ、とさらに濡れ濡れのクリを弾く音が周囲に大きく響いた時、それはシンシアの目の前に現れた。

【第三ブロック侵入ミッションクリア。おめでとうござい  
ます、第三ブロックへの侵入を許可します。ブロック障壁  
の前までお進みください】

「——え？」

【第三ブロック侵入ミッションクリア。おめでとうござい  
ます、第三ブロックへの侵入を許可します。ブロック障壁  
の前までお進みください】

「……え、だって、わたし……、まだ……」

【第三ブロック侵入ミッションクリア。おめでとうござい

ます、第三ブロックへの侵入を許可します。ブロック障壁の前までお進みください】

シンシアは呆然と下方を見る。小瓶は既に赤いラインなどゆうに越え、今や溢れんばかりになみなみと彼女が垂らした愛液を湛えていた。その状況にシンシアは思わず我に返る。

——足元に広がるまるでお漏らしをしたかのような水たまり。

——姿勢制御魔法により掛かり、まるで娼婦のように股間を広げている現状。

——そしてだらしなく口元から垂れる唾液の糸。

——いったい、誰がどうしてこの状況を作ってしまったのか。

「うーん、シンシアちゃん、溜まってたんだねえ、好みの弄り方もわかったし、俺も頑張っちゃおうかな？」

シンシアの痴態を管理層から遠視投影で見ていた徹はニヤニヤと呟いた。

(わたし……、わたし……)

シンシアは考える。自分はいったい何をしていたのか。カイルを思いながら自慰に耽るのはいつものことだ。しかし、自分は今確かに、ついさつき何度も何度も辱められた方法で、自分を慰めていなかったか。



右手の中指と人差し指で弾くように弄ばれ、そして割れ目は左手によりやわやわと掻き混ぜられて形を変えていく。修道服という聖職の衣に身を包みながらも、白い肌を晒し、股を広げて裾を唾えながら尻の穴までぐちゃぐちゃに濡らして、両手で性器を陶然とした表情で弄ぶシンシアは、徹の劣情を掻き立てるには十分な姿であった。

その光景に当てられて、反射的に思わず肉棒を扱きそうになる徹だが、なんとかかすんでの所で、踏みとどまる。漸くここまで来たのだ。まだ彼女は自ら快楽を求め始めただけである。彼に溺れたわけではない。

「……………いや、いつちやうう……………♥ 今度こそ、今度こそわたし……………わたし……………、すごい……………、すごいのがきちやう——、いつ……………うっううう♥」

そしてシンシアは両の中指を使い、きゅ、とクリトリスの皮を剥き、その陰核を露出させた。教わった通りにそのまま人差し指をその剥き出しの肉芽へと、伸ばし、こりこり、こり、と優しく撫で上げると、彼女の体の奥に潜む快感の坩堝から電気的な何か体が中に染み渡る。

「ふあ、ふあああああああん、い、いくう、いくううううううう♥」

普段出さないような猫撫で声でシンシアの口から漏らさ

れる。今の彼女の股間は、触れば触るだけ快感をもたらす魔法の小箱である。今この時、彼女の女は目覚めた。本気でいくということに。

「い、いいっ♥ き、きもちい♥ きもちいっ♥ んっ、あっ、んっ♥」

その間、尚も両の指は、敏感な肉芽をさわさわと撫でて、そしてカチカチにびんと勃起したことが十分に指から伝わり、シンシアは、きゅ、と剥き出しのクリトリスを指で押しつぶした。

「ああん!! 気持ちいい!! ——いつちやう!! ——いつちやう!! ふうあああああん♥!!」

叫ぶと同時に、ぶしゃつ、ぶしゃつと、彼女は何回も盛大な潮を花弁から吹き出させた。

【第三ブロック侵入ミッシュョンクリア。おめでとうございます、第三ブロックへの侵入を許可します。ブロック障壁の前までお進みください】

徹が仕込んだ遠視投影のメッセージだけが、静かにその場に映り続けていた。

「うし、次も気合入れてシンシアちゃんを虜にしなきゃな」  
そして彼は遠視投影に映る気持ち良くまどろむシンシアを後目に、次の管理層へと移動するのであった。



「——もう、なにやっつてるのよ、私は……」

クエスト条件クリア後も、快感を求めることを我慢できず、激しく自慰を行ったことをシンシアは深く後悔していた。

（カイルは私を信じて待っていてくれてるのに……）

だが、あのまま自慰を中断することは最早できなかったのだ。徹の愛撫により、自分の快感の次元を引き上げられてしまったことを彼女は漸く自覚する。もう昔の自分に戻れないであろうという、そんな予感じみた何かが彼女の表情を曇らせる。

（お股、気持ち悪い……）

先ほどの絶頂の後、シンシアはしばらくM字開脚で下半身を丸出しにしたまま呆けていたため、愛液が乾いて陰毛に絡みつぎ、カピカピになってしまった。歩く度にチクチクと陰毛がクリに絡み、むず痒さを再び彼女の体に蓄積させていく。そして、シンシアは第四ブロックの前に立つ。ジジ、と遠視投影が映し出される気配がすると、今度はどんな内容になるのかを固唾を呑んで見守った。

【第四ブロックの侵入クエストはありません。挑戦者はブロック内に侵入し、体を清めてください。その後、第五ブロックへの侵入クエストが開始されます】

「どういうこと？」

その内容に思わずシンシアは声を出した。

「こういうことだよ、シンシアちゃん!!」

徹の叫びと共に、第四ブロックの床が割れて浴槽が現れる。中は温水で満たされ、そして贅沢にも香草が浮かんでいた。かなり広い。ゆうに大人四人は入れそうな案配である。立ち上る湯けむりの中、彼は風呂に浸かりながらちよいちよいとシンシアにおいておいでをする。

「いやあ、ちよつとシンシアちゃんと話したくつてさ、初めましてだけど知らない仲間じゃないし、どう？ 一緒にお風呂に入りながらトークタイムといたかないかい？」

そんな湯船に浸かる不気味な男の軽いノリを見て、シンシアはこの男がダンジョンの支配者であることを確信した。【声はカットしておいたよ、これからの試練も安心して乱れてね☆】

あの空気が欠片も読まない遠視投影のメッセージを思い出し、ふつふつと怒りが込み上げると同時に、シンシアの脳裏にギミック椅子での激しくもねちっこい愛撫が思い出された。

——知らない仲間じゃないし。という先ほどの徹の言葉がそのことを指していると自覚した時、彼女は恥じらいで顔

を真っ赤にさせながら、徹に向けて叫んだ。

「あ、貴方……、私を、私とカイルをいったいどうするつもりなの!？」

「ん？ 別にどうも。ギブアップしても命までは取るつもりはないし、シンシアちゃんの処女だって、望まれないやいただかないよ？」

徹の答えた内容はシンシアにとって実に意外な返答であった。命までは取られなくとも、少なくとも魔物や触手の慰み者になることなどを彼女は予想していたのだ。

「——え、そ、そうなの？」

「信じてもらわなくてもいいけどねー、俺のダンジョンはギブ&テイクだよ。シンシアちゃんが試練に耐えれば、報酬を得る。それだけの話。ギブアップの場合は、どうするかはまだ考えてないけど、まあ悪いようにはしないよ。俺にそんな性癖ないし、何よりシンシアちゃんみたいなエロかわい子を殺しちゃうなんて趣味じゃない」

エロかわい、というフレーズにシンシアはびくと反応するが、理性の方がまだ勝る。徹のその言葉を嚙呑みするほど、この横道の変態ギミックは彼女にとって甘いものではなかった。当然の如く口から出されるのは疑念の言葉である。

「——そんなの、信じろっていうの?」

しかし、当の彼はその疑念を肯定する。

「だから信じなくていいってば。でもさ、ギミック椅子でシンシアちゃんがイッチャった時も、その次でぶしゅーって潮吹いて呆然としていた時も、俺、無理やり襲わなかったでしょ？ 絶好のチャンスなのに」

「——それは、そうだけ……」

「ま、フェアな勝負かっていうとそうじゃないのは認めるよ。でもここ俺の支配領域だし、四階までで君達もある程度稼いでいるだろうし、お互い様だよねー?」

そこまで会話した所で、二人の間に沈黙が訪れた。

そして一つ溜息をついて、沈黙を破ったのは徹である。

「……てことで服脱いでお風呂入らない？ 気持ち悪いでしょ？ ほら、一応クエスト条件だし」

【第四ブロックの侵入クエストはありません。挑戦者はブロック内に侵入し、体を清めてください。その後、第五ブロックへの侵入クエストが開始されます】

再びシンシアの目の前にびこんと、遠視投影が表示される。それを見て彼女は諦めたように頷いた。

「……わかったわ」

するすると布が擦れる音の後、湯けむり越しにちゃぽん

という音が浴槽に広がった。ゆっくりとその身をシンシアは湯につける。長い金髪がお湯に広がり、ゆらゆらと揺れた。その様子を湯船の反対方向で見つ、徹は首を傾げる。

「……隣来ないの？」

「——行くわけではないじゃない」

「うーん、話はまだあるんだけどなあ、仕方ない」

そう言うとき徹は立ち上がりシンシアのもとへじやぶじやぶと浴槽の中を歩いていく。

「——やだ。ちよつと、こつち来ないで、また私に何かする気でしょ」

「もう、さつきも言ったでしょ？ クエストの最中ならもちろんするけど、シンシアちゃんが要望しない限りは、話しかしないから」

そう言うとき、浴槽の角に逃げた彼女の横にざぶんと徹は腰を落とした。そしてジロジロとその裸体を舐め回すように見る。

「うーい、いい湯だねえ、それにやっぱシンシアちゃんエロかわいいなあ。カイル君もこんなにエロい体を放置しておくなんて罪だねえ？」

シンシアは胸や股間をまじまじと見つめる彼の視線を両手で防ぎながら、徹を改めて見た。

「……」

「ん？ どうしたの」

「……いえ、案外普通の外見で、想像していたのとは違ってたから驚いただけ」

「そうかね、どう？ 俺いい体してるつしよ。なんせ五年間かけてこのダンジョンを一人で掘ったからな、ほらこの指見てみ、ゴツゴツして太いだろ」

そう言うとき徹はシンシアの目の前に指を出す。うねうねとうねるその彼の太い五本指に、彼女はギミック椅子で自分の下半身を撫で回した無骨な感覚を思い出す。あんな太い指で、股間を弄られたという事実が下腹をきゅと締めらせた。

「——これでオマ○コ弄られると気持ち良かったら？」

「そんなこと……ないわ」

そんなことないわけがなかった。シンシアがギミック椅子でこの無骨な指にイカされ続けたのは事実である。そして今も、どういいうわけかうねる徹の指から目を離せない。

「いやあ、あの時のシンシアちゃんかわいかったなあ!! 自分の指を甘噛みしながら気持ち良すぎてスンスン泣いちゃって、ほら、俺の後始末クンニ気持ち良かった？ いっぱい舌で掻き混ぜてあげたのに、さっさと席立つちゃうん

だもん、ちよつとシヨックだったぜー」

それも否である。シンシアにとつてあの舌の愛撫は確かに気持ち良かったのだ。そのまま居たら、もう元には戻れない気がするほどに。ちやぶん、と徹が立ち上がる。シンシアの目の前に血管が浮き出るほど硬く勃起し、そそり立つ男根がぶるんと現れる。

「これ見てくれよ、シンシアちゃんのオナニー見てから勃ちつはなした、カイル君のと違つてでつかくて太いだろ？」

シンシアの目の前で揺れる逞しくそそり勃つ肉棒、そしてその後ろにある鍛え抜かれた腹筋と、引き締まった徹の体。そして節くれだち、ゴツゴツと硬く太く変化した指。それらは魔法で身体強化を行っているカイルには決して望めないナチュラルな雄度であった。彼女の女の部分が無意識に唾をゴクリと飲み込ませる。

「それが……なんだっていうのよ、もしかして口説いているの？ だつたらお生憎だけど、私が好きなのはカイル。それは変わらないわ」

そう言つてシンシアはぶいと横を向く。

ちやぶん、と徹が再び湯に浸かる音がした。

「結構結構、でもそういうことじゃない。俺はシンシアちゃんの好意が欲しいわけじゃないんだ。別にカイル君を好

きでもいいよ」

変わらないトーンで返答する徹。シンシアはその調子に少し、不気味なものを感じた。外見こそまともだが、この男は何かがおかしい。

そんな違和感を彼女は徹から感じ取る。

「——じゃあ、何が言いたいのよ」

「うん、ぶつちやけるとさ。シンシアちゃん、俺の肉便器にならない？」

それは身も蓋もない発言であった。

「あ、貴方を言ってるの!？」

「別におかしいことは言つてないけどなー、シンシアちゃんこそ、カイル君程度のチンポとセックステクニクでこれから満足できると思つているの？」

シンシアは改めて理解する。この男の頭の中は性欲しかない。だがしかし、その男、徹から続けて吐き出された言葉は——残酷なまでに、彼女の現状を抉るものであった。

「大体報酬を手に入れた後、シンシアちゃんとカイル君はどうするの？ お金を手に入れて結婚？ あのカイル君のチンポはエロかわいいシンシアちゃんをどれだけ満足させてくれるの？」

「そんな、私とカイルの思いに、性欲なんか関係な——」

「カイル君はそうかもね。でもシンシアちゃんは違うでしょ?」

間髪入れずに、返された徹の言葉に、シンシアはとっさに言い返すことができなかった。

「エッチな技はなんとかなるかもしれない、だけど体は別だよお? 俺の指であんだけ掻き回された感覚は、絶対味わえないよ? シンシアちゃんの心は満足できても、体は満足できるの?」

「……できる……わよ」

「無理だよ」

「なんで、……なんでそんなこと、貴方にわかるのよ……」  
シンシアの震えた声に、徹はニコニコと笑いながら、その太い指を彼女の胸に向ける。

「——こんな話をしてるだけで、シンシアちゃんの乳首、すごい勃起してるよ? 俺の指で摘まれたり、お口でしゃぶられたりすること、想像しちゃった?」

「……っ……これは、貴方が用意した試練の所為で……っ」  
体を庇うように抱きかかえながら徹を睨んだ。

「うーん、シンシアちゃん頑固だなあ? 俺の肉便器になればいつでもエッチしてあげるっていうのに。ま、いっか、次の試練頑張ってるね? 俺の気持ち良さを本気でわからせ

てあげる」

「な、何をする気よ」

「大丈夫、処女も奪わないし、痛くもしない。ただいっばい気持ち良くなつてもらっただけだよ。でも試練を全部耐えきつちゃったら、しょうがないね。諦めようかなあ……」

そう言つて、徹はシンシアに改めて向き直つた。

「……ふーむ」

「な、何よ、まだあるの?」

「いやさ、なんか今の言葉責めでシンシアちゃん、めっちゃ興奮しちゃつたみたいだし、慰めてあげようかなつて。このままで次の試練も影響でそうだし、何回かイッておいた方がいいんじゃないかなつて」

「——結局、いろいろ建前を並べた所で、また私の体を弄ぶのね、この嘘つき!!」

徹のその言葉に、彼女は思わず湯船から出ようとするが、しかし当の彼はまったく追う気配を見せない。

「言つたでしょ、ここじゃ君の要望がない限りは手を出さないつて」

そう言つて彼は彼女に向けて、湯冷めしちゃうよと手を伸ばす。

「え、ええ……」

その徹の反応に、拍子抜けしたような表情を浮かべ、シンシアは彼の手を掴んでちやぶんと湯の中へと戻った。

「で、どうする？　今まで以上のことにはやらないからさ、ここは犬に噛まれたと思って、イカされてみない？」

そう言つて徹はシンシアの指の間に自分の指をこすこすと擦り付けた。それはまるで恋人同士のコミュニケーション。彼女の指の隙間を行き来する無骨な指が、どうしても卑猥な行為を彼女の脳裏に思い起こさせてしまう。ただ指を擦り合わせているだけなのに、犯されている気がするのは何故だろうと。それがあまり嫌でなく、むしろ焦れつつも思えてしまうのは何故だろうと。

長い葛藤の後、シンシアはうつむき呟いた。

「……よ」

「ん？」

「……好きにすればいいって言ったのよ。よく考えたらどうせ後でも今でも、どのみち体を弄ばれてイカされることに変わりはないじゃない、もうここまで来たら変わりないわ……」

それは諦めにも近い声。

「了承だよ、それ？」

そして尚も確認する徹に対して、シンシアはきつと睨み

つけ、

「——でも約束は守つて、これまで以上のことはしないつて。それとここで誓うわ。私はカイルとの未来を諦めない。絶対次のクエストも突破してみせる。そのためなら貴方のその歪んだ欲望だって利用してやるわ!!」

先ほどの気弱なテンションとは打つて変わつて、シンシアの目に強い意志の火が灯る。

そんな彼女の啖呵に対して彼は満面の笑みを浮かべた。

（いい、いいなあ。そしてお馬鹿だなあ、シンシアちゃん!!　今までその心の誓いを何回立てたのか、そしてそのすべてが崩れ去つていくことをシンシアちゃんは理解しているのかな？　くつくつくつ、絶対にモノにしてあげるからね）

そして徹の両手の親指と人差し指が、シンシアの勃起した乳首へ向けて伸びていく。一瞬胸を庇う彼女だったが、

「ん？　嫌ならやめるけど？」

と彼が呟くと渋々とその手を退かす。彼女は気づかない。彼女の心は彼を受け入れていなくとも、体は彼を受け入れかけていることに。

「……んっ♥」

きゅつと徹に両乳首を掴まれ肩をすくめるシンシア。そ

して彼は乳首をやわやわと捏ね回す。指が乳首をコリコリと刺激する度に、彼女の口から否が応でも吐息が漏れてしまう。

「んはあ、ふあ、やあ……ん……ん……♥」

そして彼は時折摘んだ乳首を引つ張る。

「やだあ、恥ずかしい……」

シンシアの形の良い胸がきゅうつと前方へと引つ張られるが、徹は軽く乳首を摘んでいるだけなので、ある一定の位置で彼女の胸はぶるん、と徹の指の拘束から離れて元の位置に戻る。その時どうしたって徹の指とシンシアの乳首が擦れてしまい、

「——ふああんっ」

シンシアはその刺激に思わず声を漏らした。

そしてまた再び徹の指が彼女の乳首に伸びる。

「んあ……、やあん、あつ、だめ……お願い、指でこねちゃ……だ……め、恥ずかしいの……きもちいいの、はあん♥」

徹はあえて胸を揉みしただかずシンシアの乳首だけを弄ぶ。

「それじゃ引つ張るのは？」

ぶるん、ぶるん、と乳首を摘まれ、引つ張られ、また繰り返し摘まれる。

「……やあんっ…、やだあ、やるなら……もつと、ふあ

っ、優しく……」

「優しく捏ねるの、それとも抜くの？」

シンシアの懇願に、徹は右の乳首をやわやわと愛撫する。同時に左の乳首に対しては、勃起している側面を親指と人差し指で扱ってあげた。

「あつ……だめえ、……だめえ、ちくび痒くなっちゃうう……んうっ……あつ……んっ……ん♥」

「だめなの？ それじゃこうして引つ掻いてあげたり」

徹は人差し指で、くいっくいっとしてシンシアの乳首を爪で弾いてあげた。悲しいほどコリコリに育て上げられた彼女の乳首は彼の指に弾かれる度に上下にぶるぶると震わされる形になる。

「んあつ、ふあああんっ。……ああん、それ……も、だ……めえ……、んっ♥……んっ♥」

「うーん、これでだめなら、後は——」

そう言つて徹はシンシアの胸を大きく揉み込む。今まで乳首に重点的に集約されていた快感が胸全体へと分散し、彼女のおっぱいすべてが一つの性感帯としてフルに機能する。

「ふあ、あんっ、あああんっ、……やんっ、……あんっ、……あんっ」

「気持ちいい？ シンシアちゃん？」

「気持ち良く……んっ……なんてない……、——あんっ♥」

気丈に強がるシンシアに対して、徹はリズムカルに彼女の胸を揉みながら、その先端へゆつくりと顔を近づける。

「あ、だめ。……それは、カイルのなの、それは……っ」

——ちゅばっ

「んっ」

硬く勃起した彼女の乳首を彼はまず優しく啜え、

——ちゅるちゅる

「……っ……ふっ……んあっ」

次の唇を窄め、ゆつくりと吸い上げ、

——はむ、れろれろれろ

「——あっ、やっ、あっ、やんっ」

さらに口を広げ、口内で硬く反発する乳首を舌でいたぶり続ける。

——ちゅばっ、ちゅぼんっ

「ふあっ、……ふあああっ」

そして、乳首を吸っては唇で弾きを繰り返し、

——ちろちろちろちろちろ

「やああああああ、だめえええええ……、だ……めええええっ」

彼女の大好物である舌先愛撫をしてあげるのであった。乳首舐めという決して自分では試すことができない種類の快感と卑猥さに、彼女の心は大きく動揺する。

「それじゃもう片方のおっぱいもね」

耳元で囁かれた徹の言葉を聞き、為すがままにもう片方のおっぱいも弄ばれて、シンシアは絶頂を迎えるまで完全にその意識と体を徹に預けることになる。ぶじゅ、と徹の口から唾液が彼女の乳首に垂らされる。さらに期待される強い刺激に、シンシアは思わず身を震わせるのであった。

結局この後、彼女はおしっこポーズで徹に抱え上げられ、右の脇の下からおっぱいに吸い付かれながら、後ろから回された彼の両手によりクリとオマ○コを刺激され、二回。そしてさらに反対側のおっぱいに吸い付かれて二回の絶頂を迎えた。

その後、顔面騎乗で腰を振らされて一回。自分一人では知ることができなかった乳首への舌による刺激はシンシアの快感に対する羞恥のリミッターを簡単に取り外した。自ら脚を開き、男の顔の上で腰を振るという行動で、また一つ彼女の性に対する壁を取り払う。

そして、お風呂の中で徹に執拗にクリを扱かれて一回。さらに湯船の縁に座らされて、下半身を抱え込まれて乳



首とクリを同時責めされて一回。挙句の果てには、再びおっぱいに吸い付かれながらのオナニーで、彼女は放尿して果てた。

計八回の絶頂である。

ぐったりと動かないシンシアを見ながら、

「いやー、第五ブロックに向けてシンシアちゃんの弱点を探すために軽い気持ちで始めたのに、エライことになっちゃったなあ。でも効果はバッチシだ。よーし頑張るぞー」

と徹はウキウキで管理層へと帰って行くのであった。

このブロックで、シンシアは絶頂の度に、徹の後始末クンニで残り火を掻き立てられる。絶頂後もその口を花弁から離さず、震えるクリを口に含まれたり、愛液を出し続ける花弁を優しく舌で掻き回されると、彼女はどのようなもなくその体を火照らせてしまうことに気づかされた。

絶頂後にしなだれ、だらしのない姿勢のまま、時にはクリだけをずつと舌で転がされ、時には指でひだひだをやわやわと弄ばれる。そんな卑猥な自分の格好にシンシアは強い羞恥と快感を感じてしまうのであった。結果的に今回、まだ経験が浅い乳首舐めやクリ舐めを多用されたことにより、何度も絶頂へ至れる道を徹にいくつか開発されてしまう。

しかも最後などは一時間近くおっぱいと乳首を舌で舐ら

れ、自分から進んでクリを擦りあげるといふ痴態であった。徹と自分の、計四本の手で剥き出しのクリを弄び、あられもなく放尿という、実に卑猥で貪欲な絶頂である。

「後、少し、……後少しなんだからあ……」

それでも快楽のまどろみの中で、彼女は健気にも自分に言い聞かせるのである。自分はまだ処女である、まだカイルに抱かれる資格があるというその最後の砦が、最早砂上の楼閣とも気づかずに。



第五ブロックの入口にて、シンシアは立ち止まる。

そこに徹の姿を確認したからである。

「……なんで貴方が居るのかしら？」

既にその理由を予測できているのか、さして驚きを感じさせない様子で彼へ問いかけた。

「いやあ、そんなの決まつてるじゃん、シンシアちゃんもわかってるくせに」

そう言つて徹がバチンと指を鳴らすと、シンシアの目の前に遠視投影が表示される。

【第五ブロック侵入クエストが始まります、挑戦者が指定

の箇所を両手にて三十分ホールドすることで侵入が可能になります。尚、この試練でもセーフティーの利用が可能です」

音声での説明が完了すると同時に、がこんと彼女の前に二本の柱が現れた。柱は彼女の肩幅より少し広い程度の間隔が置かれていて、さらに胸の高さより少し下に棒状の取っ手が付いている。

(つまり、両手が封じられた状態で、今度は弄ばれるってわけね……)

シンシアはそう心の中で毒づくが、その試練の内容に逆にどこか安心をしていた。

「……ねえ、いくつか質問いい？」

そう言つて徹へと向き直り、どこか強気の表情で問いかける。

「さっきのブロックで貴方が言った、処女は奪わない、つて約束は信じていいのかしら？」

「もちろん、シンシアちゃんが望まない限りはね」

あり得ない、そう心の中でシンシアは再度誓う。体の外側は随分と徹に開発されてしまったが、内側まで侵略をされなければ、自分の心は折れない。それは彼女にとって最後の砦である。逆にもしあの指や性器で内側からお腹の中

を擦られてしまったら、との仮定が一瞬シンシアの脳裏をよぎるが、頭を振つてその可能性を考えることをシンシアはやめた。

「もう一つ、セーフティーつて最初のと同じ手枷のこと？」

「そゆこと、シンシアちゃんが感じまくっちゃつて、条件の取っ手から手が離れないように、今回は手の平を取っ手に吸着する形だけどね」

(つまり、三十分だけ耐えれば——)

自分とカイルの目的を達成できるのではないかと、彼女は気づく。今までの試練からして、ギブアップ条件は彼女自身が諦めるか、快楽に溺れて自ら徹に屈服した時だけである。

そしてシンシアは意を決して柱の取っ手を掴んだ。

「やるわ、セーフティーはありにして」

【第五ブロック侵入クエスト・スタート セーフティー発動、カウントを開始します】

【29…59】

【29…58】

【29…57】

両の手で取っ手を掴んだシンシアの後ろ姿を見て、徹はその口を広げ声を出さずに笑う。今、この女は完全に罠に

ハマったのだと。彼女は目先の報酬と、逸る心を抑えきれずに、事実のみに執着し、真実を見誤った。その愚かしくも愛すべき素直さは、彼の逸物をより硬く充血させていく。「シンシアちゃんがそのことに気づくのはもうちよつと後かな。……とりあえずこの三十分は楽しませてもらうよ？ シンシアちゃん？」

そして徹はシンシアへとゆつくりと近付いていく。

まず、彼女の後ろに立つと腋に手をやって、そしてポデイラインを確かめるように腰までのラインをゆつくりと撫で始めた。びっちりとしたロングタイトの修道服に沿って、何回もお腹や腰回りをすりすりとなぐられ、シンシアはその度にびくん、と体を揺らす。

「んっ……はっ」

甘く吐き出される彼女の吐息。こと徹に体を愛撫されることに關して、彼女は諦めにも似た心情を甘受していた。

「おお？」

そして徹はその行為の最中に一つの発見をする。シンシアの胸の先、黒い修道服で多少わかり難くなっているが、そこには硬くなり、ささやかに布を押し上げ、存在を主張している突起があった。

「シンシアちゃん、乳首がもう勃ってるんだね」

そう呟いて、その突起を人差し指でさわさわと撫でてやると同時に、徹はシンシアの右胸の下へと手を滑り込ませ、ぼんぼんとおっぱいを弾ませてやるのであった。

「だって、こんな、や……♥ ふあ……、やんっ、……やあん♥」

ぼよんぼよんと、手の平でおっぱいを弾まされる度に、服と乳首が擦れて彼女へ快感を伝えてしまう。

「なるほど、シンシアちゃんはこういうのも嫌じゃないと」

ならば、と今度は両手でそれぞれの胸の付け根辺りを掴み、ゆさゆつさと揺すつてやる。

「んっ……んっ……んっ……んっ♥」

シンシアの体は愛撫から来る快感と、後ろから卑猥に胸を揺らされるといふ陶醉を貪欲に性欲へと転化し、受け入れていた。胸が揺すられ、服と乳首が擦れて甘美な快感が生まれ、乳首のしこりが大きくなっていく。

「ん……っんはあっ♥」

そして突如声高くあげられた彼女の声の原因は、徹がシンシアの耳孔へじゅくり、とその舌を差し入れたことだ。

くちや、ちゅば、はむ、れるとシンシアの耳の中で反響する気味の悪い音と、柔らかに掻き混ぜられる心地良さに、

また彼女の体が開発されてしまう。

「ふあつ、——ふああんつ、やあん、やあんつ」

予想外の感覚に彼女は切ない声をあげることしかできない。そして耳を愛撫しながらも、徹は服の上から乳首をカリコリと、指で弾き続ける。

「……あつ、あつ、あつ、あつ、そ……これ、だめえ……、……ん、はあん♥」

口では嫌がるものの、シンシアのその表情はとろんとして快感を楽しんでた。

「——ねえ、シンシアちゃん、キスしよっか」

胸の愛撫を止めず、徹は彼女の耳元で囁く。

「——ふあつ、すつ、あんつ、好きにつ、すれ、ああんつ、……ばいばいじゃ……、……ない」

「ホント？ それじゃあーんして、舌も出してくれると嬉しいな」

「……残念だけど、あんつ、はあ……、キスはもうカイルにあげちゃったんだから……ああんつ、もう乳首こりこりしないでえ……あん♥」

「うーん、シンシアちゃん、それはもつたない、ちゅーつてさ——」

そう言いながら徹は彼女の前へと回り込み、両方の乳首

を親指と中指で摘み込む。

「——弄られながらすると、もつと気持ちいいと思うんだ」  
れろん、とシンシアの口内に徹の舌が侵入する。そして同時に服の上からカチカチに育った乳首をきゅつきゅと扱き始めたのであつた。

「ふあ、……あむう、ちゅ、んふ……ぶはつ。や、だめ……んつんふ……ちゅ、ちゅば」

彼女の両手はセーフティにより自由にならない。よつて乳首への刺激も、口内への徹の舌と唾液の侵略も、彼女には拒むことも防ぐこともできない。

「——ちゅ、んつ……ふつ……むうつ、はむ、ふああ」

ちゅむ、ちゅぶ、とシンシアの唇が徹に吸われ、そして口内を舐め取られ、舌を搦め捕られる度に、乳首の刺激と重なり合つて脳が麻痺させられていく。

「ほら、舌突き出して……、そしたらシンシアちゃんのかたーく尖つた、えっちなおっぱいの先つちよに、シンシアちゃんが大好きな指でびんびんしてあげるよ？」

「ふあい……♥」

その徹の囁きに、シンシアは一瞬戸惑うがゆつくりと口を開き、その舌を徹に向けて差し出した。彼は満足そうに彼女の舌尖をはむつと啞え吸つてあげる。そしてちろちろ、

ぴちぴちと、お互いで舌先を弾き合う。陶然とする彼女に徹はよくできましたと、両胸の乳首を強く、指で弾いてあげるのであった。

「ひゃあん、すきいつ、これ、すきなやつ、——あんっ……あんっ……あああっ♥」

【15…28】

【15…27】

【15…26】

「ああんっ……あんっ……あんあんああん♥ ふあああ、気持ちいい、カイルう、おねえちゃん、こんなに気持ち良くなっちゃうてるけど、頑張るからあつ、ふあ、あ、そこ、そこすっちゃう、だめえ、かゆくなっちゃう、あそこ、こりこりしてもらわなくちゃおさまなくなっちゃうのう……やあん♥」

時は経つ。カウンターがその半分を過ぎる頃、シンシアの体は快楽を完全に受け入れていた。両手を固定され、腰を引き出され、ロングタイトの修道服を胸の上まで巻き上げられる。ずっと服の上からであった乳首への刺激を、今度は直に堪能する。後ろからおっぱいをぐにと揉まれ、下からは牛のようにちゅばちゅばと乳首を吸われ、そして、横からはぶるぶる揺れて元気に育った乳首を、指で玩具の

ように弄ばれるのであった。下半身を丸出しにしてまるで犬のような格好で続けられる羞恥的な愛撫を、彼女は心のどこかで楽しんでしまっていた。

そんなシンシアの片足を抱え、徹はまるでペットや赤ちゃんと話しかけるように体位を変えた。

「は〜い、それじゃシンシアちゃん、あんよを上げましょうね。かゆくなつたあそこをこしゅこしゅしてあげましょうー?」

——くちくちくちくち、ちゅくちゅくちゅくちゅくちゅを動かされる度にシンシアの股間がいやらしく鳴いてしまう。

「——ふあああつ、こんなかつこいやあ、あああんっ、ああああんっ♥」

「ほらほらほらほら!! イきたいだろ? いっぱい焦らされたから、クリトリスいっぱい擦ってやるぞ? ほら、こんなにこりこりに硬くしてっ!! シンシアちゃんは淫乱だ!!」

徹はそう叫ぶと、シンシアのクリトリスに指を当て、彼女が一番好きであろう方法で激しく弾く。ぴちぴちゅびちゅという音が次第に大きくなり、そして、

「あああああああ、いやあああ、いぐ、いくいくう、わた

しいいいい、すごい、きちゃ……ひゃあああん!! だめえ、だめええええ!!

両手を前で固定され、胸から下は丸出し状態。片足は地面にそしてもう片足は徹に横に抱えられたわんわんな放尿ポーズで、シンシアの股間はぶしゃ、と盛大な音を立てて絶頂を迎える。

「ふあああん!! まだあ……もうゆるしてえ、あつあつ、だめえだめえ♥」

——ぶしゃつ

徹の指は止まらない、ちゅくちゅく、ぴちぴち、という愛撫音はじゃぶじゃぶ、じゅくじゅくという音に変わっていった。

「い……く、また、いく……ああん!!」

そして、徹がその指を離れた後も、彼女の絶頂は続いてしまう。ぶしゃ、ぶしゃ、と細かい絶頂がシンシアの体を襲う度に股間から太ももにかけて温かい汁が流れ落ちるのであった。

【05…11】

【05…10】

【05…09】

絶頂の余韻にまどろむ彼女の視界に、残り時間のカウン

ターが映る。

「後、後少し、……ほんとうに、後少し……」

カウントを意識できる自分の理性に、どうやら自分の心はまだカイルを思っているらしい、とシンシアは再認識する。口元からだらしなく垂れる涎も、あそこから気持ち悪いほどびゅーびゅー噴き出しているはしたない行為も、後五分。後五分ですべてが終わると。

そんなふうを考えている間にも下腹部から甘美につき上げてくる快感。それにシンシアは負けまいと抵抗する。しかし徹が絶頂後の彼女の花卉をくちゅくちゅと優しく掻き回していることに対して、シンシアの体は喜びこそすれ、もう拒むことなどできはしなかった。

そんな中、徹は彼女の敏感な所的確に舌で掻き混ぜ、そしてクリへの刺激と愛撫の音で残り火を实的確に煽っていく。

そこで彼女は赤ちゃんのように自分のクリやあそこにしゃぶりついている徹を見て、思ってしまう。この男は本当の意味で自分に酷いことはしなかったのではないかと。性的な行為は褒められたものではないが、そのベクトルはシンシアの快感という一点に向けられていた。

「ふあ、……ああん。もう、こりこりしちやだめえ」

それは、こりこりしてほしいという願望の裏返し。ご希望通り、徹がシンシアのクリをこりこりしてあげると、彼女はそれを受け入れるように自ら徹の口へ股間を押し付けた。

【03…00】

【02…59】

【02…58】

そう、形は歪だが、シンシアは徹に対して一定の理解を持ってしまったのだ。

——それは、この上ない失策である。

【02…40】

【02…39】

【02…38】

——シンシアは知らない、このゲームは、既に詰んでいることを。

「ねえ、シンシアちゃん」

「……な……によ、ふああ」

くちゆくちゆ、とシンシアの後ろに回り、その突き出された下腹部を指で優しく弄びながら彼は呟く。

「俺ね、お風呂でシンシアちゃんが失神してる時さ、実は一つだけいたずらしちゃったんだ」

「んっ……それが……あんっ……どうしたのよ？」

「俺ね、ずっとシンシアちゃんはクリが好きって思ってたんだ。だつてギミック椅子じゃあれだけパンツをぐしよぐしよに濡らしたし。次のオナニー台でもクリばつか弄ってた」

そう言つて徹は彼女のクリをこりこりと指で弄ぶ。

「んあっ……なんで今更つ、そんなことっ……あああ恥ずかしい……また硬くなっちゃう……」

「でもね、シンシアちゃんはカイル君を忘れてくれなかった、今もそう」

「だつて、私はあ……カイルのためにい……ふああああ、気持ちいい♥」

「だからね。俺、お風呂の時、シンシアちゃんの弱点を探すためにいろいろ弄つたんだ。シンシアちゃんが気絶してる時にね」

「——あつ、んっ、あつ、あんっ、あんっ……なに、きこえ、な、あんっ♥」

「そしたらシンシアちゃん、意識がないのに、すごかったんだ。乳首はすぐく硬くなっちゃつて舌を押し返すぐらいだし、あそこはぐちゃぐちゃになって二回目のお漏らしをしちゃうし、クリなんか自分から皮から出てきちゃつて」

【01…00】

【00…59】

【00…58】

そして、徹はシンシアのあそこから愛液を掬い、その場所に丹念にまぶす。さらに両の親指でぐいと広げて直接唾液を流し込んで、べちよべちよにしてから閉じてあげる。彼女の菊門は、その潤滑油をひくひくしながら受け入れ、そしてそしやぐ啣するようひくひくついていた。

「……え、やだ……なに……これ、……ふあああ♥」

「思ったんだ、シンシアちゃんはまだ自分の本当に気持ちいい所を知らないんじゃないかって。せつかくだから教えてあげるね？」

にちやにちやと、徹の舌がシンシアの菊門を舐め、そしてその入口をちゅぷちゅぷと掘り進める。それは、彼女にとつてまったくの未知の感覚であった。しかし彼女は自覚してしまうう。むず痒くも苦しい、その感覚の奥からくる重く、甘美な快感の予感を。自分の今までの我慢など吹き飛んでしまうような、これを受け入れてしまったら決して戻れない、羞恥と被虐という自分の性欲の根源を。

「ああっ……だめ、これ……だめ……、お願い、……んっおっ、やめて……、こんな感覚、わたし、がまんでできない

……、こんなのおしえられちゃったら、わたし、わたしい……」

徹はちゅるん、と舌でひくひくつくシンシアの菊門を舐め、そして人差し指を立て、唾液と愛液をまぶす。

「それじゃシンシアちゃん、シンシアちゃんが大好きなお尻の穴を弄つてあげる。大丈夫、寝ている内にはほぐしておいてあげたから、きつと気持ちいいよ？」

——カイル君のことなんて忘れちゃうぐらいにね？

ちゅぐ、と徹の人差し指がシンシアのお尻の穴に当てられ、そしてずぶずぶと菊門に呑み込まれていく。

「——かあ、——ふ、あ、——ひ、だ、……めえ……お♥……だ……め……♥」

腰を突き出し、つま先立ちになりながら、尻肉を強ばらせて懸命に彼女は徹の指の侵入を阻む、しかし。こり、こりこりこり、と彼のもう片方の指により、クリがやんわりと刺激され、

「——いやあああつ。やだ、やだやだあ、はいちやう、はいちやうううううう、こりこりだめえ、だめなの♥」

ぬつくぬつくとお尻の穴が緩んでいく中、彼女の懇願を彼は素直に受け入れて、

「それじゃ抜こうか」



「ずずず、と徹がゆっくりと中ほどまで入った人差し指を引き抜いた。

その時、それは来てしまった。

シンシアの脳裏に、自分が尻の穴から徹の指を生やしているという被虐的な情景と、きつく苦しい異物であるはずの指が引き抜かれる時にもたらされる肛門の解放感が。そして何より、自分の意志と反して、徹の指をくわえ込もうとする自分のお尻の穴。

「——あ、……あ、……あ♥……ほ……おほ……ほう♥」

じゅぶん、とさらに徹の指が突っ込まれる。先ほどより奥まで突き込まれた感覚と、中でこちよこちよと指を動かされる感覚に、彼女は肛門に異物を挿入されるといふ嫌悪感が吹き飛ぶほどのこの上ない羞恥と被虐を見出した。

「シンシアちゃん、かわいい、ほら見てみていい顔してる」徹の囁きに意識を戻されたシンシア。

目の前に遠視投影により、自分の顔が映される。

「あ……あ……、わ、たし、わた、し」

ずずず、じゅぶん、ずずず、じゅつぶん

遠視投影に映るシンシアの顔は、お尻から指が引き抜かれる度にその解放感に涎を垂らしていた。そしてさらに指を突き入れられるのを期待する歓喜の表情が映る。ふと横

を見れば、彼女を横から捉えた遠視投影の中で、突き入れる指に合わせて、今もカクカク腰を突き出す彼女の姿が映っている。さらに頭を下げて自分の股間を見れば、そこには愛液がだらだらと垂れ、地面と繋がるほどにしとどに溢れていて、

「わたし……わたし……、ふああああああつ」

「それじゃシンシアちゃん、クリをしやぶってあげながら、お尻でいっぱいかしてあげるからね？」

「ふあつ、ああんつ、きもちいつ、きもちいのつ、しんしあいくのつ、いっぱいいくのつ、……おしりと、クリでいっぱいいくのおつ!! これがまんできない、すごいのですごいの、お……ああはあ、くる、きちゃう、すごいきちゃう。

——んああああ♥んはあああああつ、いぐう、いつちやうううう♥!!」

【00..00】

【第五ブロック侵入ミッシュョンクリア。おめでとうございます。第五ブロックへの侵入を許可します。報酬を獲得してください】

そして第五ブロックの中でシンシアは目を覚ます。シン

シアの目の前には報酬である抗魔水晶が台座に置かれていた。

「わたし……」

その状況に、お尻の穴をほじられ、はしたなく乱れた先ほどの行為は夢だったかとシンシアは一瞬考えたが、ぐっしよりと濡れている修道服を見ると、あの痴態は現実にあったことだと再確認をさせられる。その途端にお尻の穴の奥がきゅ、とひくついてぶる、と彼女の体を震わせるのであった。体の奥に何かを埋め込まれてしまったように、尻穴がずぐん、ずぐんと脈を打っている。

「シンシアちゃん、報酬取らないの？」

その声に振り向くと、そこには先ほど散々シンシアを嬲った当人である徹が居た。

「な、そんな、貴方に言われるまでもないわ……」

そして、シンシアは抗魔水晶を取り、カバンに入れる。

そして、徹に振り返り、

「生憎だったわね。もう会うこともないでしょうけど、ここまで来てなしななくて言わないわよね？」

「もちろん、その水晶はシンシアちゃんのものだよ、ちゃんと一緒に脱出してね？」

——脱出してね。

その徹の言葉になにか違和感を覚えながら、彼女はふんと踵を返して出口へと向かう。——その時である。

彼女の目の前にウンと遠視投影の画面が表示された。

【第五ブロック脱出クエストが始まります。挑戦者が指定の箇所を両手にて三十分ホルドすることで脱出が可能になります。この試練でもセーフティの利用が可能です】

シンシアはそのメッセージを理解し、ガクンと膝をつく。「あれえ？ シンシアちゃん、さっきので最後だと思っただの？ やだなあ、一番最初に説明してあったじゃん、報酬を持って第一ブロックを脱出することが条件だって、帰るまでがクエストなんだよ？」

がしゃん、とシンシアの目の前に柱が二本現れた。先ほどと同じ手が離れないセーフティー機能付きの二本の取っ手が目に入り、先ほどの行為と快感が嫌でも彼女の脳裏に蘇ってしまう。

「そんな、わたし、もう、これいじょう」

——耐えられない。

そうへたり込むシンシアを徹は抱き上げ、彼女に取っ手を握らせた。そしてとても純粹な笑顔で。

「大丈夫!! シンシアちゃんえっただし!! ほらほら、またこんなに乳首立ってるし、ここを超えたら、またオナニ

「ししようね？ そしたら最後のギミック椅子でいっばいい  
じめてあげる!!」

嬉々として股間に手を差し入れ、じゅっぶじゅっぶとシンシアの股間を弄び始める徹。

「ふあんっ、カイルうう、だめえ、おねえちゃん、もうま  
けちやうかも……ふあああ、でも、きもちい……♥ きも  
ちよくて、はずかしいのもすきい……ふああん、もつとお、  
ぐりぐりしてえ……こすってイかせてえ……♥」

ここでぽきんと彼女の心は折れた。体は完全に屈服し、  
後はカイルという薄皮一枚の障壁だけである。

徹は悪辣な笑みを浮かべて、シンシアの体を弄びながら、  
どうやって仕上げをしようかと思案する。

彼が選んだ仕上げは、やはり彼女が自ら体を開くように  
仕向けることであつた。その手始めとして、彼女の体に念  
入りに快感を仕込むことに専念する。折り返しの退場クエ  
ストで、徹は弱点であるケツ穴のみを執拗に舌で舐り続け  
た。

いきたい、イかせてと懇願するシンシアであつたが、手  
を拘束されているのでどうにもならない。そして散々下半  
身をぐちよぐちよにされた上で、報酬が入ったカバンを持  
たされ、

「ほら、カイルが待つてるぞ」

と次のブロックへ送りだされてしまう。

それ故に、次のオナニー台でのシンシアの痴態は、それ  
は卑猥なものだつた。

先ほどイけなかつた分を取り返そうと、彼女は一心不乱  
に股間を擦る。行きと違うことはその場に徹がいることで  
ある。オナニー台で前後をいじらしく慰める彼女に対して、  
彼はおっぱいを弄んだり、キスで涎を流し込んだりと、そ  
の痴態を大いに楽しんだ。そして、最後のギミック椅子で、  
シンシアはお尻の穴で、徹の節くれだつた指の味を思う存  
分に堪能する。徹の頭を慈しむように抱え込み、あそこに  
押し付け、お尻の穴を指が入りする感覚に酔いしれたの  
であつた。

「くふううう……ああああ♥ きもちい、おしり、きもち  
いの……♥ さいご、さいごにするから、おねがい……も  
ういつかにゆぼつてしてえ……♥」

そして、一際大きく体を仰け反らし、絶頂を堪能した彼  
女は、改めて身なりを整えて徹と対面した。

「お疲れ様、シンシアちゃん、後は抗魔水晶を持ってカイ  
ル君の所に帰るだけだね」

まるで爽やかなスポーツでもしたかのような別れの言葉。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル  
TEL.03-3555-3431(販売) / FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、  
ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。  
また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**